

サウジアラビアにおける日本語教育の現状と学習者の学習動機づけ

ファーリス・シハーブ (キングサウド大学準教授)

(Received 15/04/1429H.; accepted for publication 10/11/1429H.)

要旨。管見の限りでは、アラブ諸国における日本語教育の現状に関する論考や学習動機についての論考の殆どは報告書の域を出ておらず、中でもサウジアラビアに関しての論文は皆無である。本稿ではまず、サウジアラビアの大学における日本語教育の現状とその変遷について論じる。次に、キングサウド大学言語翻訳学部生を対象に行われた第2外国語習得学習動機についてのアンケート結果を用いて、学習動機にも焦点を当て、日本語学習者の特徴・独自性を明らかにする。また学習動機が学習プロセスに肯定的な影響を与え、学習活動への取り組みが決定されるという観点を踏まえた上で、本科の現在のカリキュラムを見直し、今後のカリキュラム改善のためにその成果をどのように反映させるべきか考えてみたい。

はじめに

日本とサウジアラビア両国の国交は一昨年で50年、半世紀を越えたばかりであるが、最近の要人の往来からも分かるようにその関係は深く、主に石油を軸にした経済的・技術的なつながりは当初から重要視されてきた(注1)。サウジアラビアは、日本にとって最大の石油輸入相手国であり、サウジアラビアにとって日本はアメリカに次ぐ第2の貿易相手国である。この関係を一層強めることになる文化的・学術的な交流の場として、キングサウド大学に日本語専攻課程が開設される運びとなったのである。開設から10年以上に亘り、行政、教育、外交など各方面の関係者方々の努力によって、本専攻課程は維持・発展してきた。日本語専攻課程に在籍する現在の学生のため、また今後のサウジアラビアにおける日本語教育発展のためにも、今直面している課題を振り返り、学習者側の動機という点に視点を当てつつ、科の効率的な運営や効果的な学習方法について改善点を模索する必要がある。本稿の構成は以下の通りである。

1. 日本語専攻課程の開設の背景および沿革
2. サウジアラビアにおける日本語の位置づけとその重要性

3. 日本語教育の重要性と学習者の動機
4. 教育内容および教材、その改善点
 - 1) カリキュラム
 - 2) 教材と教授法
5. 終わりに ―課題と今後の展望―

1. 日本語専攻課程の開設の背景および沿革

サウジアラビアでの日本語教育は、キングサウド大学で行われている。本大学はサウジアラビアでは最も古い歴史を持ち、総合大学として文科系と理科系を有する最高学府として今から50年程前に設立された。ここに日本語専攻課程が開設されたのは14年前の事であり、サウジアラビアでは唯一の日本語を担う機関である。また湾岸諸国の中では、政府主導で設立された唯一の日本語専攻課程でもある。

日本語専攻課程の開設は、イスラーム暦1411年(西暦1990年)11月13日付の内閣告示の手紙を大学側が受け取った後、およそ3年の準備期間において1993年に着手され、1994年2月5日第2セメスターからスタートした(注2)。現在の正式名称は、「言語翻訳学部アジア言語翻訳学科日本語専攻課程」である。当初言語翻訳学部は

文学部の中に併設されたが、この学部開設の背景にはサウジアラビアにおける多言語主義の台頭という時代の趨勢があり、「各外国語の専門家を確保し、有能な人材を養成する研究所を設立する」という告示の内容を受けて設立されたいきさつがある。アジア言語学科には日本語の他に、ペルシャ語、ヘブライ語、ウルドゥー語、トルコ語、中国語の6ヶ国語、またヨーロッパ言語学科としては英語、仏語、独語、西語、伊語、露語の6ヶ国語、加えてアフリカ言語としてスワヒリ語、ホサ語の2コースが開設される計画であった（注3）。

日本語専攻課程の担当のスタッフは、まず1993年9月に国際交流基金から専門家として日本人教員1名が派遣され、同年11月に大学はエジプト人教員を採用した。続いて1994年11月にもう一人のエジプト人教員が着任したことで、教員スタッフは計3名となった。教員数としては十分とは言えないまでも、本専攻課程への学生の入学がスタートしたのである。その翌年の1995年1月1日には、言語翻訳研究所が文学部より独立したことを受け、言語翻訳学部として昇格したためBAコースとなり、教育期間も3年制から5年制へと拡大することで専攻課程の教育は大きく前進した。この背景には、学部が開設された際と同じようにサウジ国民のニーズに応える目的に加えて、1990年の閣議決定の国策として多くの言語の教育を目標として掲げる多言語主義が依然として強く影響しており、日本語をも含む外国語専攻課程の昇格が順調に実現したのである。

サウジアラビアにおける日本語専攻課程はまだ歴史は浅いが、サウジのみならず湾岸諸国における初めての本格的な日本語教育の場であり、湾岸各国の学生にも門戸を開放し、サウジアラビアだけでなく湾岸地域全体の日本語教育の中心となることが今後も期待され、その果たす役割は大きい。

2. サウジアラビアにおける日本語の位置づけとその重要性

サウジアラビアと日本は、国交開始当初から現在に至るまで要人の交流は途切れることなく順調に続いており、現在のサウジアラビア国王アブドラ・ビン・アブドルアジズ殿下が皇太子として1998年10月に日本を訪問された際にも、共同声明の中で「我が国サウジアラビアは

、日本を単なる商売相手とは見ていない。」と述べられている（注4）。この公式声明から、サウジ側は国家指導者レベルでも日本に経済交流だけでなく今以上の深い関係を求めているということが窺い知れる。また現在の副首相兼国家警備隊長官スルターン・ビン・アブドルアジズ皇太子殿下が2006年4月訪日された際の共同声明にも、日本・サウジアラビア王国間の戦略的・重層的パートナーシップ構築についてのテーマが掲げられており、引き続き両国間に積極的な協力体制を築きたいと考えているのが分かる（注5）。

一方、日本側もサウジとの協力関係を全面的に支持しており、2007年春就任後すぐに中東各国を公式訪問された安倍総理も、4月のアブドラ国王との会談の中で、今までのように石油中心の両国関係のみならず、投資や人材教育など幅広い協力関係を築くことで共同声明を採択している。この中には、エネルギーに関する協力の促進と共に、両国間の投資機会の増進のため、官民一体となった多層的な経済関係を推し進めたいという意向が織り込まれている。また文化・教育などの分野の交流に関しても、サウジアラビア人学生が日本の大学や技術機関で学ぶことを奨励するなど、これまで以上に日本の経験や知識を活用してサウジ社会に貢献しようという協力関係も表明した（注6）。

両国間の交流を振り返れば、例えばJICA（国際協力機構）を初めとする政府機関を通して、日本の大学や専門機関へ長期・短期研修員の受け入れや、日本人専門家の長期・短期派遣等の技術協力が現在に至るまで行われてきた歴史がある。主な協力分野は電気・電子関係の高等教育、通信・放送、野生生物保護、社会基盤整備などで、今後もサウジ側は環境技術や石油産業に対する技術協力や投資など、政府および民間両レベルにわたる日本との踏み込んだ関係を求めている。このように、日本とサウジアラビア間には、経済・技術の面において密接な交流があり、サウジに貢献し得る人材として、日本語・日本文化についての知識のあるサウジ人を育成する必要があるとサウジ側は判断している。

グローバル化した国際社会において英語を初めとする外国語は、政治・経済及び文化・教育など全ての分野の交流のためには必要不可欠な手段である。国際相互理解のために様々な言語を身につけることは、サウジアラビア人のコミュニケーション能力の向上を実現し、国際

社会で生きていくための重要な教養だといえる。そういう意味で、サウジアラビアが重視している外国語教育が、将来に続くサウジアラビアの発展の一翼を担っているのであり、日本語もまた、日本とサウジアラビア両国の関係をより円滑にするため、英語やフランス語・スペイン語等と同じく重要な外国語の一つと考えられている。

サウジアラビア社会にとって日本語を学ぶメリットは、政治や経済的な観点だけでなく、アラブとは違う価値観で構成された異文化に触れ、日本語を通して世界観が広がること、また英語圏とは違った価値観を通して世界を見る目を養えること、日本語という巨大な翻訳文化を通して時代の最先端に触れることができるなどの多面的な側面が考えられ、サウジ人にとって日本語を学ぶ意義は非常に大きいといえる。特に近年のグローバリゼーション化、多文化主義の世紀といわれるこの21世紀において、日本語の重要性はますます大きくなるであろう。

とりわけサウジアラビアにおいて日本語を学ぶ意義は、以下の5点に集約されると考える。

(1) 最先端の科学技術を日本語で直接学習できる

電気・電子産業、石油化学、バイオ科学、コンピュータ関連産業や遺伝子技術、ロボット工学、経済効率システム、交通システム、最近富に問題となっている環境保全に関わる最新技術やそのシステム化、等々数え上げればきりが無いが、各産業における日本のステイタスは非常に高く、世界で最も高い評価を受けている技術先進国の一つであることは、自他共に認めるところであろう。そうした技術を日本語で直接学習できることは、サウジアラビアの発展において非常に重要であると考えられる。

(2) 日本語による翻訳文化の吸収

翻訳文化の発達した日本では、古今東西の多くの書物が日本語に翻訳されており、世界中の知識学問を日本語を通して学ぶことができる。また諸外国の最新情報に対するアクセスも早く、その翻訳や紹介がいち早くインターネットで流れる社会でもある。日本の翻訳の卓越した点は

、それらの情報が正確で公平であり、万人に分かり易く、情報の源に至るまで言及されているものが多いということであろう。この緻密さが日本の情報収集の特徴である。日本語で書かれた文献から情報を得ることは、世界のスタンダードを知る一つの手段でもある。この場合のスタンダードとは、最新技術や情報の他に、サウジアラビアについて書かれた情報も含まれ、世界における客観的なサウジアラビア像を知る一手段ともなる。

(3) 日本の経験を学び新しい世界を考えるヒントとなる

日本文化には欧米、他のアジア諸国などの文化とはかなり異なった独自性がある。日本は江戸時代に300年の長きにわたる鎖国政策をとったため、円熟した独自の国内文化と独立採算制の経済社会を形成することができた。明治以降の日本は欧米の技術・文化を摂取するという目標を持って、アジアの国で最も早く近代化を成し遂げたが、思考様式、行動様式の全てが洋風化されたわけではない。底流には日本独自の文化や思考が脈打っている。伝統の保持と技術革新の両立は日本のお家芸である。サウジもまた自国の伝統を守りつつ、近代化を図るという課題を背負っており、日本が現在までたどってきた発展のあり方は、一つの参考でもあり示唆ともなるだろう。

(4) サウジアラビアにおける日本語サービスという新分野への貢献

近年、サウジアラビア政府は、石油だけで国家財政を全て賄うことは将来困難になるであろうとの予測から観光事業にも目を向け始めている。また2005年にWTO（世界貿易機関）に加盟したことで、サウジアラビアへ入国する外国人は、ビジネスビザと巡礼ビザ取得者以外にも広がるのではないかと予想される時代を迎えている。つまり近い将来、サウジアラビアにも諸外国と同じように、観光ビザで訪れる人々を対象としたサービス産業が新たに生まれる可能性が高くなったということである。年間を通して様々な国に旅行する日本人は多く、これまでは

観光ビザを出していなかったサウジにも日本人が訪れることで、今後は日本語を話す人材の必要性が予想され、翻訳・通訳などの需要も増すと思われる。

(5) 巡礼等の際の日本語サービスを含めた日本語でのイスラーム紹介

これはイスラームの聖地メッカを有するサウジアラビアならではの言語需要である。現在メッカやメディーナを訪れる外国人に対しては、英語を初めとして、ペルシャ語、ウルドゥ語、フランス語などによる説明、アナウンスなどのサービスがあるが、日本語のサービスはほとんど行われていない。メッカにおいて一年に一回ハッジ（大巡礼）が行われ、年間を通してオムラ（小巡礼）が、今も熱心に行われており、サウジアラビアを訪れる外国人はますます増えているが、こういった宗教行事についての最新情報を日本に紹介し、イスラーム理解の一環とする機関はない。またイスラームの行事、価値観、イスラームを軸とした人々の生活を直接日本語で紹介するなどの試みに関して、サウジからの発信は非常に少ないと言ってもいいだろう。

現在では、最先端の科学の観点からクラーンの卓越性が具体的な例を用いて証明されたり、宗教と科学の歩み寄りについての議論が行われたりしている。国際政治においても、イスラームを巡っての活発な議論は、湾岸戦争以来、非常に重要な位置を占めている。様々な情報が飛び交う中、イスラームを真に理解してもらうため、客観的で正確な情報を日本に紹介するなど、サウジアラビアに生まれた者としての使命として、日本語を使って取り組むべき課題は多く、今後も宗教に関わる相互理解の機会や必要性は増えていくことが考えられる。特に日本におけるイスラーム理解についての情報は、端緒からその殆どを欧米の視点や価値観を通して入ってきたものであった。最近では日本人自らの直接取材によって紹介されるニュースも増えてきたが、イスラームやアラブの等身大の理解というレベルにはまだ遠く、欧米、特にアメリカ寄りのメディアを抜きにしては語れない。色眼鏡でイスラームを「理解」している日本の大多数の人々に対して、直接的にサウジ人が日

本語で語りかけるのは、両国の文化交流にとって質的転換の契機となる出来事であるといっても過言ではない。宗教的な視点でコミュニケーションを図るということは、日本にとって非常に苦手な分野であり、日本人にとっては異文化、異なった宗教への扉を開くことでもある。

人々の価値観が多様化し年間の自殺者が3万人を超えるとも言われる、宗教的には稀有な国日本に対して、多少なりともサウジアラビアが貢献できるとすれば、イスラームやアラブの価値観を紹介することであろう。これは、日本にとって有意義であろうし、宗教的な交流の裾野を広げるという意味で、日本・サウジアラビア双方に得ることは多いのではないだろうか。以上、日本語を学ぶ意義について述べてきたが、サウジアラビア政府がキングサワード大学に日本語専攻課程を開講するにあたり、その開設当初から日本の国際交流基金による日本語専攻課程の支援が続けられ、既に10余年を迎える。サウジアラビア側からも日本側からも日本語教育の重要性は今後増えていくことが予想され、大学および我々教員も日本語専攻課程の発展に向けて努力しなければならないと考える。

3. 日本語教育の重要性と学習者の動機

日本語が教えられている国は、サウジアラビアを含め、7地域126ヶ国。日本語教育機関は13,639ヶ所を数え、約280万人の学習者が日本語を学んでいるといわれる。1979年から2006年の27年間で教育機関数は11.9倍となり、学習者は23.4倍にも増えた。現在では、このように世界中の多くの人々が日本語を学習するという時代に入っている（注7）。徐々にではあるがサウジアラビアでも、日本に留学する、日本人と知り合いになるなどがきっかけとなり、日本文化や言葉を理解し興味を持つサウジ人が増えつつある。また日本語専攻課程に在籍していない他学部や学科の学生や、また医学部や歯学部など理科系の学生が、自分の専攻と併行して日本語を学びたいと本科を訪れる。また一般社会人からも、日本大使館等を通して大学に問い合わせが来ることも多くなっている。

しかし一般的には、中東の中でもサウジアラビアは日本の文化的プレゼンスが非常に小さい国の一つであり、東南アジアや南米における日本文化の浸透ぶりに比べるとまだまだ希少である。最近では日本のアニメーションがアラ

ピア語吹替えでテレビ放映されたり、男子の間では空手や柔道の教室も普及しているが、当地における日本とは「車と電気製品の国」、「技術・経済大国」というステレオタイプの考え方が優勢である。もちろんこれまでも、国際交流基金の文化活動の一環として、空手や柔道・剣道等の武道家がサウジを訪れたり、日本の伝統工芸や版画・写真・ポスター等の展覧会が開催されたりするなど、日本文化に対する理解を促進しようという試みが日本大使館を中心に行われてきた。また昨年（2006年）には国交50周年記念年として、大使館主催の茶会・生花・映画会などが開催され、今後もこういった文化的な広報活動を積極的に行っていくという強い要望も仄聞する。これまでは、こういった日本の姿に直接触れることができるサウジ人はほんの一部であったが、今後サウジアラビアにおいても情報化社会の益々の進展によって、日本文化に対する多様なニーズが出てくるであろうことは時代の流れであり、想像するに難くない。

そういった状況の中で、当国の日本語教育はどうあるべきかが問われているが、両政府レベルでの文化交流や一般論はさて置いて、本稿ではまず、現在在籍する専攻課程学生の学習意欲を高め学習効果をあげるためにはどのような視点が必要かについて、学生の生の声や学生のアンケートから具体的に探り、その解決策並びに改善点を見出したい。

学生の学習動機や学習成果に関して論じる前に、当専攻課程の入学時の根本的な問題について言及しておく必要がある。サウジアラビアの教育制度は日本同様、基本的には「6・3・3・4制」であるが、書類選考（高校卒業時の成績）により進学先が決まるシステムが採用されている。つまり成績の良い学生は希望する学部や学科に優先的に進学できるが、そうでない学生は入学登録課の決める進学先から選択しなければならない。そのため、日本語専攻課程の新入生が全て最初から希望して入学してきたわけではないということになる。かなりの新入生にとって日本語専攻課程は自動的に振り分けられた進学先であり、本人の志向に関わらず在籍している学生が多い。もちろん、日本のアニメやゲームの影響で日本語を学ぼうと当専攻課程を選ぶ学生や、入学してから日本語に興味を持ち始める学生もいるが、学び続ける動機に乏しい学生がセメスターの途中で辞めてしまうケースは珍しくない。これは日本語専攻課程だけ

の問題ではなく、すぐに実学に結びつく英語は別として、他の外国語を教える教員にとっても頭の痛い課題となっている。

また、入学後についても、現在の進学システムでは、他の専攻課程や学科・学部（転部（科））するには成績の良し悪しに関わってくるので、学習意欲の低い学生はそのままに学し続けるか、辞めるかの選択肢しかないのである。折角入学したにも関わらず、何人かの学習者は仕方なく、あるいは半ば強制的に日本語を学ばなければならないという環境において、それぞれの学生が前向きな動機を見つけ、学習意欲を高めるにはどうすればよいかという課題は、教師にとって実に奥の深い問題である。自主的に日本語を選び、さらに学びたいという学習者だけを対象にするのか、そうでない者も含めるのかでは、学習動機や成果を分析する上で大きな問題となるだろう。

本稿の目的は、進学システムの改善を提案したり、教育行政云々を論じたりするものではない。むしろ現実問題として考える必要があるのは、与えられた学習環境の中で、学生（自主的に日本語を選択した学生のみでなく、割り振られ消極的に在籍している者も含む）の動機を教師がどううまく汲み取るべきかということである。意欲レベルの異なるそれぞれの学生に合わせて、どのような切り口で動機づけを図れば継続して学ぶことができるのか、または日本語だけでなく一般教養としての幅広い教養をどのように身につけさせ、彼らの人生に本専攻課程の教育がどのように寄与できるかを探らなければならない。また科の運営という視点でも、意欲のある学生だけを対象にした実践だけにとどまらず、入学してきた学生全てに応用できるような教育内容を採択しなければ専攻課程の安定には結びつかない。日本語を純粋に学ぶということも大切な目標であるが、教養としての学問という側面からも、学習動機を大きく捉えて教育的な効果を上げていかなくてはなるまい。

それでは、キングサウド大学の日本語専攻の学生も含めて、サウジ人が日本語を学びたい場合の動機は何であろうか。新入生・在学生、または一般のサウジ人との見聞の中からは、次のような動機が浮かび上がってくる。

- (1) 日本の経済力、技術的な水準の高さに対する 関心
- (2) 日本とのビジネスや就職チャンスの拡大
- (3) 伝統的な日本文化への関心

- (4) 広く浸透しているマンガやゲーム、ポピュラー音楽など日本のサブカルチャーへの関心
- (5) 日本語そのものに対する興味関心
- (6) アラブ諸国一般の傾向として、日本や日本人に対する良いイメージ
 (これといった資源もない日本がアジアの国でいち早く近代化を成し遂げたこと。第二次大戦の大敗にもかかわらず、急速な経済復興をした国というイメージ。アラブ諸国とは戦争や占領といったマイナスの歴史がない。ドラマや映画などから、日本の国民性として礼儀正しいというイメージがある等)

歴史的に日本と関わりの深い国々の場合は、これ以外にも戦後処理や政府開発援助につながる関係といった背景もあり、日本語の学習動機は、両国の歴史や政治・経済関係に強く影響され、その運営にも大きな影響力を持っている。

サウジアラビアの場合、当日本語専攻課程に在籍する学生個々に学習動機について尋ねると、文化と経済間の重要性の度合いには、上記の一般的な関心の結果と比べて多少のずれがあるように思われる。他の国の学習者にも言えることであろうが、純粋に日本の文化等について勉強したいというよりも、経済大国である日本の言語を習い、社会に出て日本と関係のある仕事をしたいというのが大多数の学生の本音のようである。彼らが日本語専攻課程に入学した契機を尋ねると、やはり皆一様に卒業後の就職を非常に強く意識しているのが分かる。本専攻課程の学生が全て男子のみで構成されており(サウジアラビアでは小学校から大学まで男子校と女子校とに完全に分かれており、日本語専攻課程は男子部のみで開設)、純粋な文化吸収が第一の動機となるよりも、経済的動機が優先されるのは自然の成り行きであろう。また彼らがこのような学習動機を持つ背景として、サウジアラビアに入ってくる日本の情報が物質的なものに偏っているということも原因の一つとして挙げられるのではないだろうか。つまり、ポップスや映画、アニメといったものも入っているが、大多数のサウジ人にとって「日本」とは、TOYOTAであり、SONYであり、MITSUBISHI、Panasonicなのである。

かつて、外国語の学習動機をGardnerとLambertは大きく2つのタイプに分類し、instrumental motivation (道具的動機づけ—「目標外国語を習得することが仕事や生活上有利に働くために学習する」)と、integrative motivation (統合的動機づけ—「学習目標外国語の用いられる社会の一員とみなされるために学習する」)を挙げた(注8)。これを受けて、どちらがより効果的であるかの研究があり、統合的動機づけが効果的であるという論説(注9)や、道具的動機づけの方が有効であるという研究結果(注10)、さらに両方が関連しているという研究結果が出されている(注11)。その後、Dörnyeiはこの2つの動機を第一の統合的動機づけに集約し、第二に「言語的な自信」を加え、下位カテゴリーとして第三の「教室環境への評価」を提唱した。またこの論を一步進めて、第二言語学習の動機に関わる要素として、言語レベル(language level)、学習者レベル(learner level)、学習状況レベル(learning situation level)の3つにまとめた論説を発表した。(注12)

では、サウジ人学生の場合はどうであろうか。ここに外国語学習動機に関わる興味深いアンケート結果がある。このアンケートは、キングサウド大学文学部のアル=アブダーン教授が行ったもので、言語翻訳学部アジア言語学科の学生102名とヨーロッパ言語学科119名の学生を対象としている。キングサウド大学の学生が英語以外の外国語学習の重要性をどこまで認識しているか、またどういう学習動機を持っているか、という意図で行ったアンケートであるが、ここでは日本語に関わる設問だけを抽出する(注13)。

氏の論文では、アジア言語学科3専攻課程(日本語、ペルシャ語、トルコ語)の中で、それぞれの言語の社会的重要性について調査している。その結果、「3つの外国語のうち、現代社会の中ではどの外国語が最も重要性があるか」という質問に対し、アジア言語学科では日本語が73.0%、ペルシャ語が59.5%、トルコ語は37.5%が最も重要であるという回答であった(注14)

つまり、現在本大学で開講されている3つのアジア言語専攻課程の中で、日本語は最も

重要な言語であると回答している学生が多いのである。これは驚くべきことである。というのは、サウジ人にとってイランもトルコもイスラーム教徒の多い国であり、文化的にも歴史的にもつながりは深く、サウジアラビアと国境を接する隣国であるからである。にも関わらず、日本語の方が学習の重要性が高いと判断した理由は何であろうか。日本語専攻課程の学生のみならず、多くの学生が技術・経済大国として日本や日本語を意識していることは周知の事実であり、ここにはやはり、現代社会における外国語習得の重要性が、経済・技術を抜きにしては考えられないという現実があるのではないだろうか。

また同アンケートの設問の一つに、「学生個々人にとってどの外国語が重要か」という問いがある。この結果についても、日本語が最も重要だと61.6%の学生が答えている。次はペルシャ語であったが、わずか9.6%しか占めていない(注15)。つまり学生個人の私的な意味においても日本語は重要であると考えているのである。このように日本を意識するようになった背景としては、サウジ社会が日本製品に慣れていることに加え、子供時代からTVで日本のアニメーションを見て育った世代が現大学生の殆どを占めていること、衛星放送やインターネットの普及によって現在でも日本発のポップカルチャーの大きな影響力が無視できない要素となっていることが推測できる。

学習動機に関わるアンケート結果については、もう一つ別の視点から興味深い結果が出ている。「ムスリムとしてどの外国語が必要か」という設問に対して、日本語学習の必要性は80.8%と高い数値が出ており、ペルシャ語は70.5%、トルコ語は30.0%であった(注16)。この結果から、サウジアラビアの学生は宗教に関することでも、日本語を重要な言語だと位置付けているのである。文化的に接点の少ない日本に対しても、イスラームという宗教的接点でとらえており、宗教が経済的動機と同じように重要視されるというアンケート結果は、サウジ人学生独自の動機として興味深い。サウジアラビアのメッカ、マディーナにはイスラームの中で最も重要な二大聖モスクがあり、毎年200万とも300万ともいわれる世界の人々が、ハッジ(大巡礼)のために集う。加えて一年を通しオムラ(小巡礼)でメッカやメディーナを訪れる外国人は、それ以上の数に上るであろう。訪れる

外国人巡礼者に対し、巡礼の儀式の説明や本当のイスラーム像を外国語で伝えたいというサウジ人の使命感が、このアンケート結果からも伺えるのである。

このアンケートにおいて日本語の重要性が浮き出てきたということは、日本語専攻課程学生だけでなく、アジア言語学科の学生にとっても日本語は有意義な言語として認識されており、学習動機として大きな位置を持っていると言えるのではないだろうか。

以上、アンケートの結果から日本語を学ぶ意義あるいは学習動機を違う角度から再認識し、サウジ人学生ならではの動機の特徴や独自性を述べたが(注17)、実際には国の歴史や経済事情、教育行政や教育制度、学習者の質や志向など様々な要因が複雑にからみあっている。そこで、サウジ人学生の動機や意欲という視点から、前述の先行研究のどのカテゴリーに入るのか考えてみたい。

まず初めに、アンケートから浮かび上がってきた特徴である外国語習得動機における宗教の存在はどのような位置づけになるのであろうか。GardnerとLambertの説に沿って考察すれば、第二番目の統合的動機づけの可能性は非常に少なくなる。なぜなら統合的動機というのは単に相手の文化に対しての憧れだけではなく、極端に言えば、相手の文化に融け込むため自分の文化をある程度切り捨てなければならない、という意味合いも含まれているからである。特に宗教という動機を重視しているサウジ人学習者のメンタリティーから考えると、Gardnerらの統合的動機によって外国語を学ぶという学生は少ないであろう。

またもう一方の道具的動機づけについて考えてみれば、サウジ人の場合には言語を学ぶ目的が「仕事や生活上」のためだけでなく、これらに「宗教的目的」という要素を加える必要があるだろう。「仕事や生活上有利なため」といえば実利目的であるが、「宗教のために外国語を学ぶ」ということは、実利とはかけ離れた「使命感」や「精神的満足」という側面が強い。したがって、サウジ人学生の言語学習動機については、完全に「道具的」とか問われれば違和感があるというのが妥当であろう。広い意味での「道具的動機づけ」だとしても、やはり微妙なずれがあるように思われる。

中世・近世においては、キリスト教文化圏や仏教文化圏またはその他の宗教文化圏で、

外国語学習の大きな動機として「布教活動」があった。しかし合理的な志向が強い現代社会の中では、宗教を外国語学習動機とする国は非常に少ないのではないだろうか。サウジアラビアでは現在でも一日5回のサラ（礼拝）タイムには全ての商店が閉められ、ラマダーン（断食月）には国全体の勤務時間が大幅に短縮されるなど、全ての国民の生活が宗教と密接なつながりの中で営まれている。外国語習得においても、宗教的動機が現在でも依然として大きな位置を占めるのは、サウジ人学生特有とも言える動機であり、経済や文化より宗教を優先するという社会の現れが、学習動機の背景ともなっているのであろう。

この学習動機としての宗教に対する関心の高さは、Dörnyeiが提唱した外国語学習動機の3要素のうち、第二の学習者レベル（*learner level*）の範疇に入るのではないだろうか。これは学習者がそれまでに培ってきた個人的特性ということであるが、サウジの場合は学習者の所属する「国家的な特性」という解釈も加えることより正確に位置づけることができよう。

さて、実際の教室の場面では、専攻課程入学後日本文化に触れる機会が増えるに従って、物質的な動機だけでなく他の動機も新たに加わり、日本語の勉強を続けたいという熱意を持った学生も育ってくる。それは、例えば「どうして日本が経済発展したのか知りたい」「日本文化が面白い」「日本の歴史を知りたい」「日本語自体が面白い」「漢字は面白いので好きである」「授業が面白い」というように実際の感想となって身近な教師に伝えられるもので、これは、Dörnyeiの提唱した第三の「教室環境」によって学習動機が上がり、学習成果となってあらわれるケースであるといえる。文化的・人的交流から見て日本とは歴史の浅いサウジアラビアゆえに、直接的な経験として触れる日本の情報量は他国に比べて驚くほど少ない。サウジには観光ビザがないため、旅行で訪れる日本人に限られていることに加え、ビジネスビザで入国する日本人も欧米に比較し少なく、実際に日本人に会ったことのある学生は稀有である。学生にとって日本は地理的にも遠い国であり、全く未知の存在なのである。そのため入学して初めて日本語や日本文化に触れた学生の目には、その情報や文化が非常に独特で新鮮なものに映るのであ

らう。この好奇心が日本語を学び続ける原動力になっている学生もいる。

また、外国語学習においてその国の人々との接触が少ないということは、学習するモチベーションを維持する上で非常に不利であるが、そのため日本語専攻課程の場合は、いきおい教員からの影響という比重が高くなる。教師は最大の教材であるといった論もあるように、教室やその他の場面で、日本人教員及び日本に留学した経験のある教員の教え方や立ち居振る舞いに触れ、日本人の価値観や生き方について新しい刺激を受けた学生の中には、それが学習動機の一つになったと話すことも多い。日本語というマイナーな言語ゆえに、学習動機が教員ひとりひとりの資質にも関わってくるというのも、サウジアラビアならではの日本語教育の特色とも言えなくはない。特に学習意欲に関しては、先に述べたように高校の成績で割り振られ仕方なく日本語を学ぶ自発的な動機に乏しい学生にとって、優れた教室環境は一つの学習動機になるであろうし、教室での様々な取り組み方によっては効果の上がる場合が多い。また、自ら学ぶ目的を持っている学生にとっても、教室環境は大きな意味を持つ。

このように教室環境が動機付けの大きなファクターの一つとなるということは、Dörnyeiの提唱した学習動機に関わる構成要素「学習状況レベル」にも合致する。さらに学習状況レベルを細分化すれば、コース全体の中に、各々シラバスや教材、教授法、タスクというように細分化された構成要素があるが、ここでは本専攻課程学生の動機を分類・分析する等の厳密な論議についてはひとまず置いて別の論考に譲り、現実的改善という視点から本専攻課程に必要なことを導き出したい。

これまで述べてきたことから、本専攻課程の教育を考える際、今までの実践に加えて宗教的な内容を加えること、また「学習状況レベル」の改善が大きなファクターとなるのではないかと。つまり、この2つはサウジ人学生の大多数に応用と活用ができ、また専攻課程あるいは各教員レベルでの実施が可能であろうと考えられる。もちろん、純粋に「道具的な動機」である経済や生活上必要という側面は不可欠であり、これはサウジ人学生のみならず、広く一般的に通用するので、特にここで論じる必要はないであろう。本専攻課程の場合は、それに加えて宗教をベースにした動機づけを用いて、日本語

学習への意欲を高めることができるのではないだろうか。この動機は、サウジ人学生が一様に持っている志向に根ざしたもののだけに、「イスラーム的使命感」という側面から迫ることで、新たな学習効果を期待できると思われる。

また、日本文化に対する興味を学習者に持ってもらうことも非常に効果的である。そのために、動機を持って入学した学生層とそうでない学生層という二つの意欲レベルの異なる学生集団に対して、入学時の対応に少し工夫が必要になってくる。新学期の初めに、教員がきちんとしたガイダンスを行うことはもちろんのこと、在学学生や卒業生をその場に呼んで、新入生のためのガイダンスに参加してもらおう。学生という同じ立場から自分の経験を語ってもらうことで、新入生は日本語を学ぶ意義について考えることもできるし、将来に対して具体的な展望を持つことができ、動機づけには非常に効果的である。もちろんガイダンスは一時間の設定であるので十分ではなく、授業が始まってから少なくとも一週間くらいは、DVDやビデオ、写真、視覚聴覚教材などを使って日本文化を紹介する。新入生は日本語を言語として学ぶ前に、日本語の特質や文化のいろいろな面について知ることができるため、学生本人の意思とは関係なく日本語専攻課程へ入学してきた学生にも積極的な動機づけのきっかけとなるとと思われる。言語を学ぶメリットや将来への展望について考えることで、興味を持続し易くなるであろう。

「学習状況レベル」をどのように改善していくかという課題については、具体的な方法として次のように様々なアイデアが考えられる。①教育施設設備の拡充、②教育課程及びカリキュラムの改善、③実習・交流会などの体験学習、④魅力のある教材の開発、⑤学生間のグループ構成 等々である。

実際の教室環境を広く捉えての改善は、意欲レベルの異なる学生にそれぞれ合った方法を模索する必要があるだろう。その中で最大限の学習効果をあげるために、一人一人の学生用個人カルテを作る必要も一考の価値があるだろう。このカルテによって、学生各自の学習目標を的確に把握することができ、教員間の共通理解も得ることができる。学生一人一人の自己実現に向けてサポート体制を作ることで、途中離脱者の減少にも効果があるのではないかと期待される。

以上の点を踏まえて、特に教育内容の改善について、「学習状況レベル」の改善に向けての具体的な取り組みについて述べていきたい。

4. 教育内容および教材とその問題点

サウジ人学生の性質やその動機を見極めた上で、現状に合った改善を加えていくことで学習成果を上げ、サウジアラビアにおける日本語の普及にもつながる道を探ってきたが、ここでは、教育内容のうち当大学が現在取り組んでいるカリキュラム改善と教材開発を中心に述べる。

カリキュラム改善に関しては、現在実践されている、純粋に言語能力を高める講義だけで構成されているカリキュラムでは、サウジ人学生の学習動機の観点からも理想と現実とずれがあり、学習動機の維持という点からも不十分であると思われる。

また教室環境の改善という視点から述べれば、教員一人一人の自覚は自明のことであるが、現在使用されている教材についても取り組むべき課題が山積している。これは、サウジアラビアの日本語教育だけの課題ではなく、アラブ圏全体に関わる課題である。アラブで最初に日本語教育がカイロ大学で行われるようになって久しいが、アラビア語を母国語とする学習者のための教科書は殆どないのが現実であり、現場の教師の負担を増やし、アラビア語を効果的に使った魅力的な授業実践に少なからずマイナス要因となっている。

カリキュラム

本大学での日本語専攻課程では、学部が定めた教育目標に沿ってカリキュラムを実施している。その教育目標には、5年間で基礎の言語教育を行うことに加えて、通訳・翻訳者といった専門職としての人材を養成することも掲げられている。日本語専攻が発足した当初は、3年制のディプロマコースだったため、カリキュラムも第1レベルから第6レベルまでの3年間を終えると卒業することになっていた。1998年の9月から5年制BAコースとして昇格したのを期に、カリキュラムも5年制となり、レベルは第10レベルまで設定されるようになった。そのカリキュラムは下表の通りである。

<カリキュラム表-波線は一般共通科目>

第1レベル		第2レベル	
科目	時間数	科目	時間数
聴解 1	3	聴解 2	3
語彙 1	3	語彙 2	2
筆記 1	4	筆記 2	4
読解 1	4	読解 2	4
発話 1	4	発話 2	3
文法 1	2	文法 2	2
——		辞書技能	2
週計	20	週計	20
第3レベル		第4レベル	
科目	時間数	科目	時間数
応用統合論 1 (アラビア語)	3	修辞学 1 (アラビア語)	3
応用形態論 1 (アラビア語)	3	応用統合論 2 (アラビア語)	3
翻訳へのコンピューターの応用	2	イスラム文化入門	2
筆記 3	3	筆記 4	2
聴解 3	2	翻訳学入門	2
読解 3	3	読解 4	2
発話 3	2	発話 4	2
文法 3	2	日本文化読解 1	2
週計	20	週計	20
第5レベル		第6レベル	
科目	時間数	科目	時間数
応用統合論 3 (アラビア語)	3	速読翻訳	2
テキスト言語学	2	双方向通訳 1	2
文体論	3	翻訳 (イスラーム)	2
言語学	3	翻訳 (軍事)	2
意味論入門	3	翻訳 (経営学)	2
翻訳 (自然科学)	2	翻訳 (医学)	2
翻訳 (人文学)	2	翻訳 (工学)	2
比較文化	2	翻訳 (マスメディア)	2
週計	20	週計	18

時間数合計：174時間（うち、一般共通科目の時間数は：34、日本語専攻の科目の時間数は140）

<カリキュラム表-波線は一般共通科目>

第7レベル		第8レベル	
科目	時間数	科目	時間数
応用形態論2 (アラビア語)	3	応用総合論4(アラビア語)	3
翻訳へのコンピューターの応用	3	イスラムにおける経済制度	2
イスラムと社会づくり	2	翻訳 (政治学)	2
日本文化読解 2	3	翻訳 (教育)	2
アラビア語化	2	連続通訳 2	2
翻訳 (社会学)	2	翻訳 (商業)	2
—————		翻訳 (安全保障)	2
—————		翻訳 (コンピュータ)	2
週計	15	週計	17
第9レベル		第10レベル	
科目	時間数	科目	時間数
翻訳 (法律)	2	イスラムにおける政治制度	2
翻訳 (石油科学)	2	双方向通訳 2	2
翻訳 (農業)	2	要約と翻訳	3
翻訳 (文学)	2	翻訳の問題点	3
翻訳プロジェクト	2	同時通訳	2
週計	12	週計	12

時間数合計：174時間（うち、一般共通科目の時間数は：34、日本語専攻の科目の時間数は140）

以上のカリキュラムを概観すると、内容的には2つの段階に大別できる。第1段階は基礎教育であり、第1レベルから第4レベルの2年間。筆記、聴解、発話、読解の授業を通して、言語の4つの技能の基礎固めをする段階である。それを前提として実践能力を高める次の第2段階は、第5レベルから第10レベルまでの3年間に設定され、翻訳・通訳のできる人材の養成をも視野においた教育がなされている。計5年間の現在のカリキュラム自体は大変立派なものであるが、日本語教育としては言語特性に即していない点があり、日本語専攻課程運営のネックの一つとなっている。本科のカリキュラムは学部全体の決まりに縛られており、言語翻訳学部などの言語のコースも全く同じカリキュラムに沿って実施されている。日本語教員は独自に計画することも作成することもカリキュラム面ではできないという制約が課せられており、それぞれの外国語学習における特殊性を考慮していなかったため、様々な問題点が立ちはだかっていた。日本語は、言語学的に文字や文法などの点で独立性が高く、他の言語よりも学習上の差異や

課題が多くなる。現カリキュラムの問題は、次のような点に集約される。

(1) 日本語は、基本的な文法に加え漢字を教えないければ次の段階へは進むことができない言語的な

特性を持つが、カリキュラム上では一気に翻訳の科目へと移行するため、無理が多い。しかしながら、文字に関する科目は特に設定

されてはいない。アルファベットなど文字数の少ない他の言語ならば、書字に関する授業は学習の初めあるいは初級で学習を終えて次の段階に進めることができるが、日本語は平仮名や平仮名の後に漢字学習があり、これは中級・上級に上がるにつれて同音異義語や語彙数も増えてくるので、学習を継続しなければ習得が難しい。つまり漢字に関する学習は、レベルが上がっても習得に多大の時間が必要なのである。

また文法を学ぶ時間も第1、2、3レベルで終了し、その上、各レベル2時間ずつしかないため、どの時間でどの程度まで教えればよいか頭の痛い問題であった。こういった日本語の特殊性は、他の専攻課程教員や学部上層部の責任者に理解してもらうことが難しく、日本語教師にとってのストレスの一つとなっていた。

- (2) これは、どの言語専攻課程にも共通の問題であるが、対象言語の文化を学ぶ授業が無く、カリキュラム内容は純粋に言語習得を目的にした科目のみである。つまり、言葉としての日本語の習得のみに重点が置かれてカリキュラムがデザインされているのである。

しかし、言葉は実社会を抜きにしては理解することができないのであって、特にアラブ人にとって文化的に隔たりのある日本については、日本文化や、日本の歴史、日本事情など、一般教養程度の内容でも良いから新たな科目を設け、学習者に幅広い教養を身につけさせることが必要不可欠であろう。

- (3) どの専攻課程も第5レベルから人文と自然科学、第6レベルからは軍事・工学・安全保障・医学・法律等の特殊な翻訳の授業が設定されており、外国語を履修してわずか2、3年にしかならない学生に、専門的な内容での授業や翻訳が課せられている。こうした科目には学生のレベルに合わせた独自の教材はまずなく、理科系を始め各専門分野には難解な用語が多用された文章課題がほとんどなので、前述した漢字の読解という問題も加算されて学生にとって難しい授業となっている。学生のみならず教える側としても、学生の能力に合わせた参考文献や教科書を分野ごとに見つけなければならず、それも日本語という特殊性から日本から取り寄せるなどの方法を取らざるを得ない。あるいは自作教材を開発するしかないが、多岐に亘る教科内容のため、慢性的な教員不足の上に時間的な制約もかかり、日本語教育のハードルを高くする一つの要因となっていた。

- (4) 卒業直前の第9レベルの学生は全員、4年間のカリキュラム終了時に卒業論文に相当する翻訳プロジェクトを提出しなければならない。これは日本語で出版された最近の書物から100ページをアラビア語に翻訳するという課題である。基本的には翻訳物の分野は、科学や医学、先端技術に関わる出版物という決まりがあり、日本語を十分に習熟していない学生にとって大変難しい課題となっている。英語専攻課程の学生であれば、小学生や中学生からの英語学習の積み重ねもあり、英文での情報量や参考文献も多いため、この課題をクリアすることは容易であろう。また他の言語専攻課程の場合も、言語的には同じ系統に属していたり（インドヨーロッパ語族等）、アラブと文化を共有するので、全く別の言語ファミリーに所属する日本語とは、出発点から違っている。

またトルコやイランなど同じ文化や宗教を共有した歴史を持つ外国語であれば、語源を同じくする語彙が多いなど、外国語を学ぶための基礎知識などの面で、日本語よりもはるかに有利な言語の方が多い。大学に入学して日本語に初めて触れ、ほとんどゼロの知識からスタートする日本語専攻の学生にとっては、出版物を翻訳するというのは4年間の学習だけではとても無理がある。翻訳の難しさは言語レベルの問題だけでなく、日本に関する幅広い一般知識も必要である。それぞれの外国語の文化や生活などについての学習は、カリキュラム上でも組み込まれていないため、多くの学生にとって、日本という未知の国を相手にするこの課題は容易ではないと推測されるのである。

2) カリキュラムの改善点

上述したことから判断できるように、現在日本語専攻課程が採用しているカリキュラムについては早急に見直しが必要であると、各国語教員は以前から様々な会議で討議してきた。実際この5年間は、学科全体が改善に向けて具体的な論議を尽くし、新カリキュラム作成に向けて努力してきた経緯がある。アジア言語学科、ヨーロッパ言語学科でそれぞれカリキュラム委

員会を設けて検討してきた結果、2007年5月に新しいカリキュラム案として完成した。素案は学部から大学本部へ提出され、2008年度以降の

早期実現に向け現在は本部からの許可・認定を待っている段階である。以下の表は、提出中の日本語専攻課程の新カリキュラム案である。

<新カリキュラム表(案)-波線は一般共通科目>

第1レベル		第2レベル	
科目	時間数	科目	時間数
聴解・発話	4	聴解1	3
読解1 会話1	4	発話1	3
筆記1	3	読解2	4
文法1	4	筆記2	3
語彙1	3	文法2	4
コンピューターと 言語学習技能	2	語彙2	3
週計	20	週計	20
第3レベル		第4レベル	
科目	時間数	科目	時間数
聴解2	3	聴解3	4
発話2	3	発話3	4
読解3	4	読解4	4
筆記3	4	筆記4	4
文法3	4	文法4	4
語彙3	2	—————	
週計	20	週計	20
第5レベル		第6レベル	
科目	時間数	科目	時間数
イスラム文化入門	2	イスラムと社会づくり	2
言語技能(アラビア語)	2	読解技能1(アラビア語)	2
外国語 1	4	外国語 2	4
文学読解1	2	文学読解2	2
日本語史	2	小論文	3
言語学入門	2	音韻論・音声学	2
辞書技能	2	形態統語論	2
翻訳入門	2	—————	
週計	18	週計	17

時間数合計：175時間（うち、外国語も含めての一般共通科目の時間数は：38、日本語専攻の科目の時間数は137）

<新カリキュラム表(案)-波線は一般共通科目>

第7レベル		第8レベル	
科目	時間数	科目	時間数
筆記技能1 (アラビア語)	2	統合論2 (アラビア語)	2
統合論1 (アラビア語)	2	形態論 (アラビア語)	2
外国語 3	4	外国語 4	4
日本文化1	2	日本文化2	2
対照言語学	2	文体論	2
意味論・語用論	2	通訳	2
テキスト言語学	2	翻訳 科学技術	2
週計	17	週計	17
第9レベル		第10レベル	
科目	時間数	科目	時間数
イスラムにおける経済制度	2	イスラム政治制度の基礎	2
言語研究方法	2	比較文化	2
言語と文化	2	機械翻訳	3
翻訳とアラビア語化の問題	2	翻訳文学	2
翻訳経済と商業	2	プロジェクト	3
翻訳政治と法律	2	_____	
翻訳イスラム	2	_____	
週計	14	週計	12

時間数合計：175時間（うち、外国語も含めての一般共通科目の時間数は：38、日本語専攻の科目の時間数は137）

以上の新カリキュラム案は、現在実施されているカリキュラムについてどの点を改善すれば良いか、それぞれの専攻課程の要望を基に議論されて出来上がったものである。どの言語の専攻課程にも適用できるように考えられたものであるが、概観すると日本語専攻課程にとっては、以下の点が改善されている。

- (1) カリキュラム構成は、言語技能科目から始まり、専門の言語科目に入り、その後実践的な翻訳や通訳の学習に入るというように、応用言語学上、無理のない科目構成になった。従ってレベルを上げていくことができるように改善された。
- (2) 第1レベルから第4レベルまでの言語技能習得に関する時間数が現在の64から80時間に増え、現在のカリキュラムよりも、文法、筆記など日本語にとっては不可

欠な言語の4つの技能の基礎固めが期待できるようになる。

- (3) 現在のカリキュラムでは言語技能に関する科目は4レベルで終了であった。これに対して新カリキュラムでは、上学年の8レベルまで継続して学べるよう延長された。これにより、学習内容が分断されることなく併行して続けられるようになり、8レベル以降に8レベル以降に設定された専門的で実践的な翻訳科目等へのスムーズな移行が期待される。
- (4) 新カリキュラム表には各言語専攻課程の科目構成だけを記載しているが、第5レベルから第10レベルまで、全ての学生は専門言語の授業以外にも、共通科目としてアラビア語やイスラームの科目も履修する。新カリキュラムでは、この一般共通科目の教育内容も例えば、アラビア語言

語技能やアラビア語の統語論、形態論やイスラム文化など、言語専門教科と関連性を持つよう随時改善している（新カリキュラム表を参照）。一般教養科目の3つのカリキュラムを各言語専攻課程のカリキュラムとオーバーラップさせることで、相互に学習効果が上がるよう工夫されている。また、言語翻訳の技能を高めつつ、モチベーションを維持することにつながることも大いに期待されるであろう。

- (5) 第5レベルから第10レベルの現カリキュラムの中には、前述したように軍事や安全保障、政治、経済、農業など合わせて18分野にわたる細分化された翻訳の授業がある。この枠組みを大幅に組み替えたのが新カリキュラムである。例えば、政治と経済というように独立していたのを「政治・法律」に一本化したため、総合的にテーマが扱えることになった。また学生が翻訳科目を実際にするのは、現カリキュラムの5レベルからではなく、新カリキュラムでは、言語基礎ができた上の8レベルからということになり、学生にはより高度な翻訳能力が期待できると考えられる。
- そして、グローバリズム時代や21世紀の類のない技術革命のもとで翻訳にコンピューターや最新の技術を利用する必要から、第10レベルに機械翻訳の科目を導入することになった。これにより、学生が機械翻訳に関する基礎知識を習得し、コンピューター言語に関する理解を深め、それを実際の翻訳にどう応用できるかを学習し、実用的な科目がバランスよく学べるようになったと言えよう。一方、口頭能力養成の科目が「通訳」の一つに減ってしまい、翻訳能力養成科目とのバランスが十分にとれなかったのはこれからの課題の一つであると言える。
- (6) 日本文化・文学を学ぶ科目が第5レベルから第10レベルにまでそれぞれ新設された。言語専門学習だけの現カリキュラムよりも様々な教育内容を組み込めるようになり、学習者の興味・関心をこれまで以上に高めることができる。積極的に日本

語を学びたいと考えて入学した学生にはもちろんのこと、学習動機に欠ける一部の新生にとっても、あるいは既に在学している学生にとっても、日本語学習の背景となる一般教養が深まり、幅広い知識を持つことにつながるであろう。これによって、今まで以上に学生が日本語・日本文化への興味を持続させることが可能となり、学習成果の伸張が期待されるであろう。

- (7) イスラームに関する翻訳を第6レベルから第9レベルに移行し、より高度な内容が翻訳できるように改善された。宗教に関わる翻訳を、習熟度の低い第6レベルからより高度な翻訳が可能な第9レベルへと繰り上げたことで、学習上無理のないカリキュラム編成になった。これにより、アンケートの中に浮かび上がった学習動機の一つである「宗教のために言語を活用したい」という学生の希望も、より適切なレベルで実現できると予想される。
- (8) 第5レベルから第8レベルまでの科目に選択性のカリキュラムを導入し、様々な外国語に対して興味を持っている学生が、自分の専攻した言語学習と併行して第2外国語も履修できるようになった。つまり新カリキュラムでは、どの言語専攻課程の学生も各レベルで週4時間（計2年間）、言語翻訳学部で開講されている他の言語専攻課程の基礎科目を選択して学ぶことが可能となった。これによるメリットは、学生が幅広く他の外国語を学ぶことができるだけでなく、他の学部・学科・専攻課程学生が本専攻課程に加わることで、日本語を理解する学生が増え、相互に新しい刺激効果を期待することができる。
- (9) 現カリキュラムには翻訳科目が圧倒的多数を占めるのに対して、新カリキュラムには専門性の高い科目、例えば、音韻論・音声学、形態統語論、対照言語学、意味論・語用論、言語研究方法などが数多くあり、学生が単なる言語知識だけでは

なく、専門的な学問の基礎知識を身につけることが期待できるであろう。

- (10) 翻訳プロジェクトについては問題が完全に改善されたとは言えないが、現在のカリキュラムでは第9レベルの科目であったのを卒業学年の第10レベルの科目へと繰り上げた。履修のレベルを繰り上げた第一の理由は、モチベーションの側面からである。第9レベルで卒業に必要な翻訳プロジェクトを終了すると、学生の中には最終レベルに上がった途端、学習に対して力を抜いてしまう傾向が見られる。また、翻訳のレベルが十分に上がった段階で翻訳プロジェクトに取りかかれば、翻訳対象となる教材の内容が学生の日本語能力や志向に合わせ易くなり、今までよりも高度なものを選択することができるようになる。

以上述べた点から判断できることは、これらの新改善案が認定されて実際に新カリキュラムが適用されることになれば、現行のカリキュラムが抱えている問題もかなりの部分が改善されるであろう。それによって、最終的な学生の日本語能力の基準設定が可能となり、専攻課程全体としての日本語のレベルが自然に引き上げられることに繋がるのではないかということである。しかし、新カリキュラムに変更しても、完全に日本語専攻課程独自のカリキュラム編成とはなっておらず、改善の余地が未だ残っている。特に日本文化や社会については、一般的な教養を学ぶ授業は新カリキュラムでも十分とはいえ、歴史や経済などさらに幅広く内容を広げる必要があり、これからの課題の一つであると言える。

3) 教材と教授法

本専攻課程で現在使われているテキストの殆どは、日本で出版されたものである。サウジ人の母国語であるアラビア語で書かれた自作教材としては、初級者用の『かなをまなぼう (アルアハラム新聞社刊)』と、初級から中級前半までのテキスト『アラブ人のための日本語 (アルアハラム新聞社刊)』の2冊以外にはない。カリキュラム上は、最初の2年間 (第1から4レベル) で基礎的な文型や語彙を教えることに

なっているため、主な教科書として上述の『アラブ人のための日本語』、『かなをまなぼう』と共に、『みんなの日本語II (スリーエーネットワーク)』、『基本漢字500

vo1.1 (凡人社)』などを使用している。また、現カリキュラム上では3年目 (第5レベル) から人文学、自然科学、軍事、工学などの翻訳科目が殆どとなるが、現段階では学生の日本語能力がまだ翻訳ができるほど十分なレベルにはないため、能力に合わせた教科書が見つからないという教師側の悩みがある。カリキュラムが統合されたとはいえ、今後も教員は雑誌、新聞などを元に自作教材を作って対処していくなどの努力が必要となるであろう。

教授法については、日本人の講師は主に直接法を使用し、聴解、発話 (会話)、作文などの授業の殆どを直説法で教えている。アラビア語を母語とする講師は、日本人講師と同じように日本語の直接法で教えるのを基本としているが、学生習熟レベルに合わせた配慮から、理解が難しい場合は状況に応じてアラビア語を媒介語として用い、随時説明を加えることにしている。

5. おわりに一課題と今後の展望一

以上サウジアラビアにおける日本語教育の重要な位置づけや現状を述べ、日本語学習の特徴・独自性を絡めながら、サウジ人の学習動機の特徴に合わせた教育方法の改善の可能性について考察してきた。また、実際の学習環境の改善策として、現行のカリキュラムについて、その問題点を踏まえた上で新カリキュラムへの移行の経緯と評価を中心に、論じてきた。

日本語専攻課程は開設して10年を超えたとはいえ、まだ歴史も浅く、益々の発展というには未だ以下のような多くの課題が残されている。箇条書きでまとめると、次の5点が現在の課題であり、今後さらに内外へ向けての働きかけが必要となってくるであろう。

1) 教員不足

現在直面している一番大きな問題は、日本語専攻課程教員 (特にアラビア語を母国語とする教員) の絶対的な不足と、サウジ人の教員養成という課題である。これは日本語専攻課程開設以来の課題であるが、早晩解決しなければ、授業の質

だけでなく開講授業数の不足という新たな問題とも関わってくる。キングサウド大学の制度では1年を2セメスターに分け、半年ごとに学生の入学を認めているので、5年制といえども10レベルの学生を教える体制となっている。仮に全レベルの学生が在籍したとすれば、1週間に140時間の授業時間が存在することになり、理論上は最低でも8名の教員が必要である。1999年から現在まで、国際交流基金からの派遣教師が2名となり（専門家・ジュニア派遣専門家）、大学側は従来の1名に加えもう1名の日本人講師を採用し、計5名となった。これは、2007年6月までの状況であるが、この状況下にあっても全科目をカリキュラムに忠実に開講するためには教員数が不足しており、現教員が超過勤務をせざるを得ない状況が続いていた。

ところが、2007年6月をもってジュニア派遣専門家が2年の任期を終え、後任は派遣されないという通告を受けたために、状況はなお厳しいものとなった。日本語専攻課程としては大学側採用の教員が今よりも増員され、完全に独立運営できる体制になるまで、ジュニア専門家派遣の再開を嘆願する所存である。既に、これまでの授業ですら5名の教員では賄いきれておらず、全教員の超過勤務でなんとか補っていたのであるが、今後新しいカリキュラムが施行された場合は、教員の不足はますます深刻なものになり、理想的な実施というには無理が生じてくることは否めない。

2) その他の教育機関が皆無であること

サウジアラビアでの日本語教育は、キングサウド大学でしか行われていない。同大学の日本語専攻課程の学生以外にも、日本語を勉強したいと考えている一般社会人、他大学もしくは他学部学生は少なからずいる。実際、聴講という形で受講できないものかという問い合わせが毎年かなりある。しかしながら大学としては聴講を認めておらず、日本語専攻課程に在籍している学生以外の受講は許されない。これは非常に残念なことである。サウジの一般人が日本語を勉強することができるような機会や場を広げていくことで、卒業生も継続して学習する機会が増え、日本語能力のレベルを保持できると考えられるからである。例えば日本大使館がセンター的な役割を担って日本語講座などを

開くことができれば、また幅広い新しい学習層を開拓することも可能になり、日本語学習者が増えることで日本語教育の有機的な発展も望めるだろう。

3) 教材開発の課題

新しい教材開発が早急に必要であるという事は、日本との交流の歴史の浅い文化圏では共通の悩みである。現在出版されている利用可能な日本語教科書は、英語話者を対象としているものが圧倒的多数である。アラブ人学生の英語力の問題はさておき、学習者の母語（アラビア語）で書かれた教科書、教材、辞書などがあれば学習効率も格段に上がることが予想される。教室内外での学生の意欲・関心を今以上に高めるには、アラブあるいはサウジアラビアの現状に合った独自性のある教材の開発が必要であり、これからも教員各自の主體的で積極的な自作教材作成が不可欠であろう。できれば、アラブ圏あげての取り組みが望ましいが、そのためにも教材開発や企画のための協力、物質的・精神的両面の援助が必要とされている。

4) 日本語に触れる機会を増やす努力

さらに第4の課題は、日本語専攻の学生と「日本」との接触場面をいかに増やすかということであろう。サウジアラビアの実生活の中では、学生が日本語で会話をするチャンスは少なく、日本語を耳にしたり、日本語を読んだりする機会は、インターネットや衛星放送などを除けば殆どないといってもよい。結局学生は与えられた教材の中だけで日本語と触れ合い、狭い情報に閉じ込められてしまっている。なるべく多くの優秀な学生に「日本」に触れる機会、例えば短期・長期留学、日本研修旅行などの機会が与えられれば、学生の学習意欲も益々高まり、以後の学習効果に直接的に結びつくことは想像に難くない。そのためにも、訪日研修の枠を広げて多くの優秀な学生に日本研修の機会を与えられることができるよう、サウジや日本の様々な関係機関にご協力をお願いする次第である。

日本語の習得をより完全なものにするためには、その国に短期間でも滞在することが望ましいが、全ての学生にそういった機会を与えることは不可能である。そこで様々な解決策を

考える必要がある。例えば、サウジアラビアに事務所を置く商社や企業にご協力をお願いして、実習（インターン）という形で仕事をしながら日本語に触れる機会を増やすということも考えられる。また、サウジにある日本人会にも協力をお願いして、卒業生や一般のサウジ人も含めた日本語サークル活動という計画も考えられる。こういった様々な機会を通じて、今後も学生が日本語に触れる機会をますます増やし、人的コンタクトを豊かにしていく必要がある。

5) 卒業後の就職の問題

卒業生の就職難という問題は、日本語学科に限ったことではないが、依然として存在する。それでもまだ他国に比べると、日本語専攻課程卒業生も少なく、昨今のサウダイゼーションの後押しもあって就職のチャンスは少なからずある。高い学習意欲と能力を持った優秀な学生ならばもちろんのこと、成績が中レベルの卒業生でも日本企業などで働くチャンスが少なからずある状況は幸運でもある（注18）。大学での学問や研究は実際の就職に直接的に結びつくべきだと考える人は多いが、もう一度、大学教育のあり方を真剣に議論すべき時期に来ていると言えるだろう。理想としては、大学で学んだ学問や教養がそのまま生かせる仕事に就くというのがベストだろうが、現実問題を考えるとそのようなケースは非常に限られている。しかし、国全体として考えるならば、より多くの学生がサウジアラビアの近代化に貢献できるよう自己の潜在能力を最大限伸ばすこと、広範な分野の深い知識や技術を身につけ学び続ける意

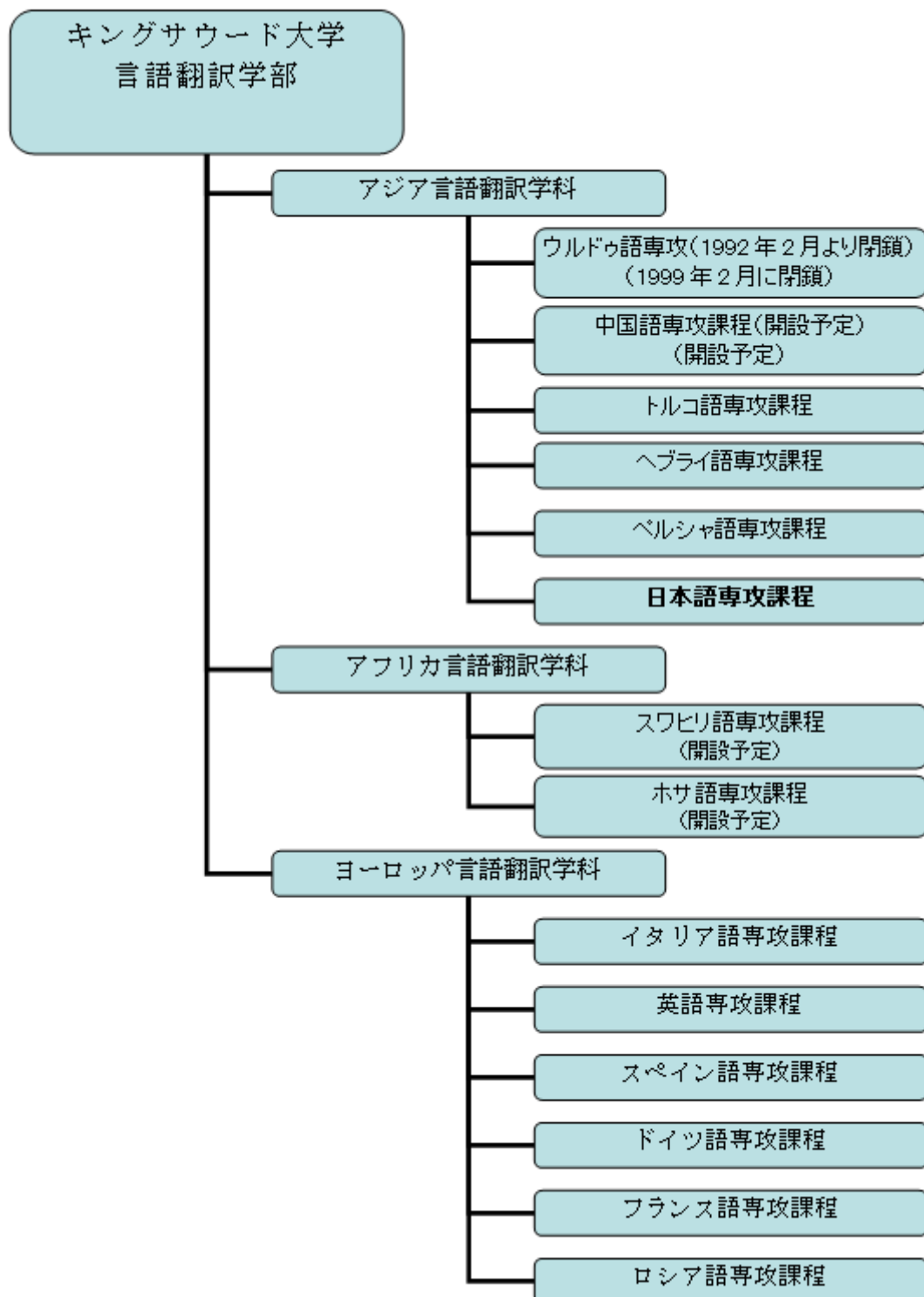
欲を持つことが、大学には求められているのではないだろうか。サウジアラビアの近代化は道半ばであり、青少年が総人口の大多数を占める社会構造を見れば、将来の国家展望として、これまで以上に幅広い分野での学問・知識の教育を重視しなければならない。残念ながら、最近の言語翻訳学部の再編成の動きの中で、外国語教育の重要性が就職問題との関連で再検討される傾向が新たに見られるようになった。つまり、「就職先の少ない言語は切り捨てる方向で再検討をしてはどうか」、あるいは、「英語のように一般的に通用する言語だけを残し、他の言語は廃止したほうが良い」という考え方が、大学の一部上層部からも出てきているのである。もちろん反対意見もあるが、実用本位の意見に対して、引き続き日本語の重要性や有用性を訴えていかなければならない。

以上、日本語専攻課程の現実の課題を挙げたが、サウジアラビアにおける日本語教育の地盤をより強固にし、将来に向けて発展させるためには、様々な問題を順次解決していかなければならないことは明白である。最後に、大学関係者及び在サウジアラビア日本大使館・国際交流基金の方々、専攻課程の全教員が今後より堅く結束し、日本語専攻課程の教育改善、また日本語や日本文化の普及に対し地道な努力を積み重ねていくことをここで再確

認しつつ、本稿が当日本語専攻課程の発展に寄与するだけでなく、日本国外に日本語学科を新設しカリキュラムデザインをする際のいくばくかの参考となれば幸いである。

注釈
(注1) 要人往来

サウジアラビアから日本へ	日本からサウジアラビアへ
1996年 5月 サウード外相	1994年 1 1月 皇太子・同妃両殿下
1997年 4月 ラシード教育相	1995年 9月 村山総理
1998年 3月 アンカリ高等教育相	1997年 9月 小杉文相
同 年 4月 サルマーン殿下	同 年 1 1月 橋本総理
同1998年10月副首相兼国家警備隊長官アブドラ・ビン・アブドルアジズ皇太子殿下	同 年 1 2月 堀内通産相
1999年 3月 ファキーフ商業大臣	1999年 3月 町村政務次官
	同年 5月 与謝野通産大臣
2001年3月アブドゥラー総合投資院総裁	2001年1月河野外務大臣
_____	2001年8月丸谷外務大臣政務官
_____	2002年4月松浪外務大臣政務官
_____	2002年 9月植竹外務副大臣の第8回国際エネルギー・フォーラムへの出席
_____	2003年5月小泉総理大臣
_____	2005年3月河井外務大臣政務官
2006年4月サウジアラビア王国スルタン・ビン・アブドゥルアジーズ・アール・サウード皇太子	_____
_____	2007年4月安倍総理大臣



2. 当初1993年9月開講の予定であったが、講師確保に時間を費やしたことに加え、政府のビザ発給にも予定した以上の時間を要したため、実際にスタートしたのは翌年の1994年2月であった。
3. 日本語専攻課程講座所属組織図 (アルファベット順)
- 4・雑誌アエラ No. 51 1998年12月14日
5. AL-JAZIRAH Arabic Newspaper, 2006/4/7 (イスラーム暦1427. 3. 9)
6. AL-JAZIRAH Arabic Newspaper, 2007/4/7 (イスラーム暦1428. 4. 12)
7. 国際交流基金「海外の日本語教育の現状—日本語教育機関調査2006年」
8. Gardner, R.C., & Lambert, W.E, Attitudes and Motivation in Second Language. Rowley : Newbury House, 1972、
9. Strong, M. 1984. Integrative motivation: cause or result of successful second language acquisition? Language Learning, 34, 3, 1-14.
10. Lukmani, Y. 1972. Motivation to learn and language proficiency. Language Learning, 22, 261-73.
11. Burstall, C. 1975. factors affecting foreign-language learning: a consideration of some recent research findings .Language teaching and Linguistics : Abstracts, 8, 5-25.
12. Dörnyei, Z. 1994, Conceptualizing motivation in foreign language classroom. Modern Language Journal, 78, 273-84.
13. Dr. Abdulrahman A. Abdan, The Motivation of University Saudi students to Learn Asian and European Languages, THE EDUCATIONAL JOURNAL-Academic Publication council-University of Kuwait, No. 77- Vol. 20, Kuwait, Zu Al-Kaida 1426- December 2005, P. 55, 67.
14. 同前書、72ページ
15. 同前書、同ページ
16. 同前書、同ページ
17. 本来サウジアラビアでの外国語学習者の独自性をよりはっきりさせるために、日本語専攻課程独自のアンケートを作り、なるべく多くの言語を対象にし、ほかのアラブ諸国を対象にし、また、対象者の年齢・性などの細かい情報を踏まえた上で研究の課題として譲ることにしたい。
- 18・日本語専攻課程の学生は卒業後、どのような就職先を希望しているのだろうか。これまでに在籍した学生に尋ねると、日本企業や日本大使館やサウジの外務省、いわゆる外交官コース、日本語の翻訳・通訳者、日本語教師などになりたい希望が大半であった。卒業後の就職に関しては、日本語専攻課程だけの問題ではない。建国と期を同じくして石油収入の恩恵を受けたサウジアラビアは、豊かな社会生活をさほど大きな苦労もなく手に入れた歴史があり、大学卒業生も労働に対する認識が甘い。就職しなくても生活がある程度保障されているため、高い給与とポジション、楽な労働を望む学生が多く、概して民間企業はサウジ人よりも賃金の安い外国人労働者を歓迎する傾向がある。こういった社会のニーズによってサウジの若者の就職難(就労難)という問題が生まれている。豊かな社会に育った若者の労働意識の改革という大きなハードルは、サウジ教育全般の課題で日本語専攻課程の学生だけの問題ではないのである。こうした状況の中、日本語専攻課程卒業生はわずかな学生数ではあるが着実に成果を上げている。3年制のディプロマコースとBAコースを終えた7名の第一期の卒業生7人の例を見ると、うち1名はTOYOTAのリヤド支店、もう1名はSONYのリヤド支店、もう1名はリヤド銀行、4人目はサウジアラビアの航空会社に就職した。残りの3名のうち1名は日本在サウジアラビア大使館に商務官として、もう1名は東京イスラーム学院に勤めている。残る1名は日本在イスラーム学院で働きながら勉強していたが、現在は日本の文部科学省の奨学金を得て、大学院に留学中である。確かに2名は日本語とは聞

係のない仕事に就いているが、7人の内5人が何らかの形で日本と関わる人生を歩んでいるというのは、日本語専攻課程としては出色の出来ではないかと思う。また第2期生の卒業生の中にも、日本の企業で働いている卒業生が2名いる。

現在、原油価格の高騰やサウジの経済の順調な発展・興隆を背景に日本企業のサウジ進出も盛んで、日本語専攻課程への求人依頼も増えており、このままサウジの経済が順調に発展していけば、日本に関係した仕事の可能性も広がるのではないかと予想される。

参考文献

1. アラビア語参考文献

- (1) AL-JAZIRAH Arabic Newspaper
- (2) Dr. Abdulrahmam A. Abdan, The Motivation of University Saudi students to Learn Asian and European Languages, THE EDUCATIONAL JOURNAL-Academic Publication council-University of Kuwait, No. 77- Vol. 20, Kuwait, Zu Al-Kaida 1426-December

2. 英語参考文献

- (1) Burstall, C. 1975. factors

affecting foreign-language learning: a consideration of some recent research findings. Language teaching and Linguistics: Abstracts, 8, 5-25.

- (2) Gardner, R. C. & Lambert, W. E. (1972) Attitudes and Motivation in Second Language. Rowley: Newbury House, 1972
- (3) Dörnyei, Z. (1994), Conceptualizing motivation in foreign language classroom. Modern Language Journal, 78, 273-84.
- (4) Lukmani, Y. 1972. Motivation to learn and language proficiency. Language Learning, 22, 261-73.
- (5) Strong, M. 1984. Integrative motivation: cause or result of successful second language acquisition? Language Learning, 34, 3, 1-14.

3. 日本語参考文献

- (1) 雑誌アエラ No. 51
1998年12月14日
- (2) 国際交流基金「海外の日本語教育の現状—日本語教育機関調査2003年」凡人社

تعلم اللغة اليابانية في المملكة العربية السعودية: دوافعه ورؤية مستقبلية

شهاب الدين السيد فارس

أستاذ مشارك، قسم اللغات الآسيوية والترجمة،

كلية اللغات والترجمة، جامعة الملك سعود،

الرياض، المملكة العربية السعودية

(قدم للنشر في ١٥/٤/١٤٢٩هـ؛ وقبل للنشر في ١٠/١١/١٤٢٩هـ)

ملخص البحث. يرى الباحث أن معظم الأبحاث عن دافعية تعلم اللغة اليابانية بالإضافة إلى واقع تعليمها في البلاد العربية - وبخاصة في المملكة العربية السعودية - لا تزيد عن كونها تقارير ترصد الواقع ولا تتجاوزه استشرافاً للتنظير لما ينبغي أن يكون عليه. وفي هذا البحث، يتناول الباحث واقع تعليم اللغة اليابانية في المملكة العربية السعودية، ثم يسلط الضوء على دافعية التعلم لدى طلاب اللغة اليابانية باستخدام استبيان أجري عن دافعية تعلم اللغة الأجنبية الثانية على طلاب كلية اللغات والترجمة بجامعة الملك سعود، وذلك بهدف الوقوف على دافعية طلاب اللغة اليابانية في تعلم هذه اللغة.

ولما كان التعرف على دافعية التعلم يؤثر على سرعة اكتساب اللغة وتحديد الأنشطة التعليمية، وإعطاء تأثيرات إيجابية لعملية التعلم تكون أساساً للتخطيط في تطوير الخطة الدراسية، فإن هذا البحث يتناول إعادة النظر في الخطة الدراسية الحالية لبرنامج اللغة اليابانية، والتفكير في كيفية انعكاس نتيجة هذا البحث في معرفة دافعية الطلاب في تعلم اللغة، لاستثمارها في تطوير الخطة الدراسية، وطرق التدريس، ومناهج أكثر فاعلية وملائمة لطلاب اللغة اليابانية..